寮生活泣き笑い

三上悦子

鉄道会社に就職した私は、昭和四十年代半ば会社の寮に住んでいた。仕事が休みの日は前の日にどんなに遅く就寝しても朝八時にはインターホンで起こされて、指示された場所を掃除する決まりになっていた。色々規則があり色んな人と上手くやっていかなければならなかった。

二年先輩の人と二人で同室の時期があった。その先輩は私が寝ていようが音楽をガンガンかけた。私が恐る恐る「もう少しボリューム下げて頂けますか」と言ってもお構いなしだった。

ある日、私は大変な腹痛に襲われた。同室のその先輩は仕事が休みで部屋に居た。私は腹痛の余りの辛さに布団の上をのた打ち回って「痛い！　痛い！」と叫んでいた。すると「煩いわね！」とその先輩は怒鳴った。私はやっとの思いで舎監の所まで行きその旨を伝えた。

会社から助役が来て下さった。パジャマにガウンを着て、助役に背負って頂いて寮の近くの病院へ行った。結果は「盲腸でもないし大丈夫だから」と薬もくれなかった。

部屋に戻って様子を見ることにしたが段々症状は酷くなる一方で、今度は大きな病院へ連れて行って頂いた。すると、腎盂腎炎（じんうじんえん）だという事ですぐ入院になった。腰を曲げた状態でないと歩けず、トイレにやっとの思いで行った。点滴を何本もして嘔吐を何度か繰り返した。

入院の翌日、それ程仲が良いわけでもない同僚が見舞いに来てくれた。私はとても嬉しかった。何人かいる舎監は誰一人来てはくれなかった。本当に辛かったが一週間もすると嘘のように回復して退院した。

寮に住んでいて本当に色んな事があった。どこにも一人はいると言われる手癖の悪い人が一人どころかかなりの人数いたことは確かだ。同室の先輩に私はお金をちょくちょく盗まれていた。ばれないように少しずつ盗んでいたのだろうが、呑気な私もさすがに気づいた。部屋にロッカーはあるが鍵が無いのでは何の意味もなかった。舎監に盗まれたことを話したら、「あの人には他にも盗まれたと言っている人がいるから」と言っていた。私が留守で部屋にいない時に勝手にロッカーを開けてお金を盗んでいたわけだ。そう思うと私は気持ちが悪くて身の毛がよだった。

寮生活泣き笑い

給料日に給料袋の入ったバックを娯楽室に置いたままトイレに行っている間にバックごと盗まれた人もいた。会社の所長に深夜に寮に来て頂いて、ミーティングをしたことも何度かあった。誰が犯人なのか皆分かっているのに、当の本人は我関せずどこ吹く風という顔をしていた。泣き出す訳でもなく表情を一切変えなかった。

就職して初めて入った寮は真新しく快適だったが、その後配属先の関係で移った寮はかなり古い寮だった。その寮で私は何度か亡霊を見たことがある。最初は金縛りにあった。息が出来なくて声も出せず、体も動かせなかった。枕元に人が立っていて足だけが見えた。「誰なの？」と聞きたくても声が出ない。やがて、その人はスーッと部屋を出て行った。その後ろ姿を私は見ていた。黒髪のボブヘアで黒のセーターに黒のスカートを穿いて、黒のストッキングだった。その頃の私に何となく似ていた。その時は夏だったので部屋のドアは開けっ放しにしていた。古い寮でクーラーも無ければ網戸も付いていなかった。

ドアでも窓でも開いている所から亡霊は入って来ると聞いた事があるが、そんな事が二度あった。私は舎監にその事を話した。すると昔、脱衣所で首つり自殺をした人がいたそうだ。私は思わず体中の血の気が引いていくのが分かった。他にそんな事を言っている人はいなかったので、亡霊を見た人は私一人だけのようだった。でも、亡霊を見た事よりも金縛りの方が何倍も辛く怖かった。

今思い出しても可笑しくて笑ってしまうことがある。東北の田舎から上京して寮に入ったばかりの頃の事。就職のため家を出る時に、母が寒い時に着るようにと持たせてくれた物を私はパジャマの上から羽織っていた。すると地元出身の同僚に「何を着ているの？それ『どてら』だよ」と失笑されてしまった。ガウンという物があるのに『どてら』を着て、ぞろぞろと階段を降りて来る私を見てさぞ笑えただろう。この時のカルチャーショックは今も忘れる事ができない。

母が気を遣って持たせてくれたが、私は二度とその『どてら』に腕を通すことはなかった。でも、昭和四十年代半ばのあの時代に東北の田舎では冬に『どてら』着ているのは普通だった。もしかしたら、今でも年配の人は着ているのかもしれない。

ある日、私は自分の部屋の窓を思い切り閉めた時に左手を挟んでしまい、薬指の爪が剥がれてしまった。その日の夜、お風呂に入って片手で頭を洗っていたら先輩が「どうしたの？　洗ってあげるから。困っている時はお互い様だからね」と言って洗ってくれた。あの時は本当に嬉しかった。そして、そういうことはいつまで経っても忘れない。時々思い出しては、あの優しい先輩は今どうしているのかと思う。いじわるをする人もいたが、優しい人もちゃんといた。

そんなこんなのある日突然、元同僚のK子から電話があり「男に付け回されている。今夜泊まる所もない。何とかならないかな」と言ってきた。舎監に聞くと寮には泊められな

いと言われた。私も一緒に誰かの所へ泊まらなければいけないということになった。その為には外泊証明書が要る。私は会社まで貰いに行き、舎監に渡した。

泊まれそうな所はその頃同じ勤務先のNさんご夫婦の所ぐらいしかなく、泊めて貰うべく二人でNさんのアパートまでお願いに伺った。

何度かノックしたらNさんがドアを開けてくれた。その時は奥様が実家へ帰っているとのことで私達は事情を話し「何とかお願いします」と頼むと「良いから泊まっていきな」と快諾して下さった。

お酒を飲もうということになり、K子と二人でお酒とおつまみを買いに出た。適当に見繕ってアパートに戻り、お酒も揃ったところで宴会が始まった。Nさんの奥様は私の元同僚だった。K子とNさんは初対面だったが、それでも楽しく飲んでいた。飲むだけ飲んで三人共眠くなり寝ることにした。Nさんは「明日は仕事だから二人共寝てていいよ」と言って下さった。

ところがだ。翌朝起きたらNさんがまだ眠っていた。「会社は？」と聞くと「具合悪いから休ませて下さい」と電話したとのこと。思わず三人で大爆笑となった。

しばらくしてK子が私に小声で「シーツに血を付けちゃった。どうしよう」と言った。どうやら生理が来たとのこと。もう面倒見きれない。この上私にどうしろと言うのか。

私はNさんに事情を話した。すると「丸めて洗濯機に入れて置けば良いから」と言われ、K子は血の付いたシーツを洗濯機に丸めて入れた。

私達はNさんに泊めて頂いたお礼を言ってアパートを出た。そしてK子を駅まで送った。

その翌日、奥様が帰って来て「何、この血は？」と聞かれたそうだがNさんは黙っていたそうだ。そりゃ、説明のしようがないでしょう。でも私達の心配をよそにNさんご夫婦は変な事にはならず、私はホッと胸を撫で下ろした。これでそのK子も一安心だと思っていた。ところが、その話にはまだ続きがあったのだ。

それからしばらく経った頃、夜中の十二時過ぎに私に電話だと舎監に叩き起こされた。こんな夜中に一体誰なのかと電話に出たら、いきなり「こちら○○警察署ですが○○さんの事でお伺いしたいことがあるのですが」と言われた。私はK子の付き合っていた人だとすぐピンときた。そんな三文芝居しなくてもバレているのに、その人はK子の事を聞いてきた。私は「何にも分かりません」とだけ答えた。しばらく話していたら、その人はとうとう自分の正体を明かした。舎監には、こんな時間に何なの、その人という顔で見られた。

その電話の事を私はK子に話した。その男の人から逃げて、誰も頼る人がいなくて私の所に来た訳だ。でも、その男の人とはきっぱり別れたと言っていた。

K子とはその後プッツリ音信不通になってしまった。年賀状を何度かくれたけど、今はどこでどうしているのだろうか。誰かに聞きたくても、私が知らないのだから誰も知らな

寮生活泣き笑い

いだろう。元気でいるといいが、色んな思い出のある人だった。
今になって思い返してみると、寮生活は悲喜こもごも泣き笑いの連続だった。あの頃は若くて良かったなと思う時もあるが、実際に若い頃は今思う程良いものでもなかった。
あの寮はとっくに取り壊され別の施設になっている。あの亡霊はまだあの場所にいるのだろうか。亡霊はサイクルの合う人のところに出てくるという。今も浮かばれずに彷徨っているのだろうか。
戻りたくても戻れないあの寮生時代。今ならキラキラ輝いていたと思える青春時代を過ごしたあの寮と寮生だった頃の自分が、たまらなく愛おしくて懐かしい。